

# 肝ミトコンドリア機能よりみた閉塞性黄疸肝切除後の病態に関する実験的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/15062">http://hdl.handle.net/2297/15062</a>

学位授与番号	医博乙第1175号
学位授与年月日	平成4年4月15日
氏名	澤 敏 治
学位論文題目	肝ミトコンドリア機能よりみた閉塞性黄疸肝切除後の病態に関する実験的研究

論文審査委員	主 査 教 授 宮 崎 逸 夫
	副 査 教 授 小 林 健 一
	教 授 渡 邊 洋 宇

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

近年、胆道系悪性腫瘍に対して積極的に肝切除を施行することが多くなってきた。しかし黄疸肝に肝切除を施行した際の残存肝の病態に関する研究は少なく、肝切除を安全にするためには残存肝の再生機能を解明することが重要な課題となっている。本研究ではイヌを用いて総胆管結紮による閉塞性黄疸を作成後、肝切除と同時に黄疸解除を行い残存肝の病態について肝ミトコンドリア機能を中心に経時的に検索した。黄疸作成の有無により対照群（単開腹1週間後に肝左2葉切除）、黄疸群（黄疸作成後1週にて肝左2葉切除、黄疸解除手術併施）の2群に分けた。得られた成績は以下のごとく要約される。

1. 肝切除後7日目に肝再生率は対照群 $64 \pm 8\%$ に対し、黄疸群は $48 \pm 9\%$ と有意に低下した。
2. 肝切除術後GOT、GPT値は、対照群ではともに肝切除後1日目に最も上昇したが、黄疸群ではGOT値が黄疸1週間後有意に上昇して、肝切除後1日目で最も大きな上昇をみたのに対し、GPTは黄疸1週間後に最大値を示して、肝切除後は漸次減少した。
3. 肝切除後の血清総蛋白、血清アルブミン、ヘパラスチンテスト値は両群とも著明に低下したが、肝切除後7日目で対照群がほぼ前値に回復したのに対して、黄疸群は肝切除後7日目でも有意に低下しており、肝での蛋白合成能は著しい低下を示した。
4. 肝ミトコンドリア機能は対照群が肝切除後1日目で最も大きな亢進を示して以後漸減したのに対し、黄疸群は黄疸作成後1週で軽度の亢進を示したものの、肝切除後1日目で機能亢進は対照群に比し有意に抑制され以後漸減した。

以上より、閉塞性黄疸状況下においては肝切除後著明な蛋白合成能の低下および肝ミトコンドリア機能亢進の抑制がみられ、その結果肝再生率が低下するものと推察される。このことより臨床において術前に経皮的胆道ドレナージによる減黄処置を行うことは、肝切除後の肝機能回復の面よりみて重要な意義があるものと考えられる。すなわち本論文は胆道癌治療に寄与する有意義な労作と認められた。